



芦屋の三年間

第11代学校長 馬場 鉄夫

昭和54年4月1日、どしゃ降りの雨の中を赴任しました。すぐ職員代表という5・6人が校長室にやってきて、要求書というものをつきつけたのには驚きました。事情、右も左もわからぬ私に、何という失敬千万などと思ったことでした。

本館は古く、エドガー・ポーの小説に出てくる英国の崩れかかった邸宅のようで、暗くじめじめしていました。

校長室の来客用のテーブルの上には、喫煙用のデカイ徳用マッチがいつも置いてありました。何代か前の校長さんの趣味だったそうで、校務員さんが探しまわるのだそうです。

その本館をつぶしにとりかかったのは1年余り後のことで、クレーン車で崩壊するのを毎日みてまわりました。

そして今度は、佛蘭西風のシャレタ建物に生まれ代わりました。

同窓会から記念にとて、佐藤忠良氏のブロンズを寄贈していただき、これ又芦屋の新名物になるだろうと一同大喜びしました。台座は印度からとりよせた赤みかげ石で、その裸婦の芸術的気品にはほとほと感心しました。

その改築の間、テニスコートにプレハブを建て、管理棟と教室2棟をたてて授業しましたが、テニス部は市内にある会社のコートをあちこち借りまわって練習するという有様でしたのに、そのテニスと弓道が県下で優勝、全国大会に出場しました。弓道も市の施設の借用であったのです。

クラブ活動は環境が悪い方が強くなるのかな、と思ったことでした。

白馬登山、文化祭等それぞれ生徒はすばらしいアイデアを出してくれて楽しい3年間でした。

街の様子も大分、変っているようですが、あの昔のままであってほしいとさえ思うことがあります。

同窓会・育友会の御厚情は今に忘れず想い出しては感謝しています。

あ、それから、私事になりますが、3年間私は生徒と同じ同期生（私が赴任した年に入学した同期）かの校章バッヂを胸につけて過ごしました。

生徒の服装は自由ですが、服装というものはその人間の心を作るもの、せめて芦高の伝統と誇りを忘れないでほしい。私も又……という気持でした。

一度尼崎の某食堂で暴力団とまちがえられたのは黒いセビロとこのバッヂのせいでしたかな。